

## ◎安心して働く

### ①安心して暮らせる街を…

■花田勝爾

#### 1—はじめに

現状ではとても「安心して暮らせる」状況などと言えたものではない。日本人には気づかないが、いつも不安でビクビクしながら生活している。住みにくいとこららしい。「だったら日本になんか来なければいいのに」と誰もが思う。来なくてすむものなら危険を冒してまで見ず知らずの異郷に来て生活したくない。その背景について検証してほしい。入管白書によると、入国して来る外国人と海外に出て行く日本人の比較は、出て行く日本人が数倍している。もちろん観光目的が圧倒的に多いのだが、二番目は仕事などの商用である。この商用と入国して来る総数を比べても、商用の方が上回っている。日本から諸外国に向けて大量に出て行く観光客。「豊かな日本」

が背景にある。極端な経済格差、肥沃な土地と豊富な資源を有する地方が、なぜ基礎体力をも生かすことができずにきたのか。大国による政治・経済の支配、日本もその一翼を担ってきた。「貧困」という意識すらなかったところに、大規模収奪と消費文化を押し付け、価値観まで変えてしまった。トランジスタ・セールスマンからエコノミックアニマルへ、日本経済は世界の至るところに進出し、自分と同じ形になるよう仕向けながら不平等な関係をつくりだしてきた。

カラバオの会が結成された直後、フィリピン沿岸漁民が操業中に遭難、貨物船に救助されて日本の港に着いたが、「帰国手続きが済むまで身柄を預かるところがないので、引き受けてほしい」と大使館から要請を受け、預かることにしたが、この時漁民たちが話して

くれたことに驚かされた。かつてフィリピン海域には取りきれないくらいの魚がいたそうだが、日比友好通商航海条約が締結され、それから何年かして全くなくなってしまうらしい。それは、この条約の中に「両国の漁民は互いの国の領海近くで操業することを認めよう」という条項が含まれていた。二人乗りのボート中心の小規模漁業と、現在の技術を備えた黒船のような漁船団では、対抗するすべもなく結果は歴然としていた。それまでは、一マイルの範囲で家族を養うに十分な仕事ができただのに、今は十マイルも二十マイルも沖に出ても、全く魚が取れなくなってしまうらしい。その結果、彼らは危険を承知で沖合に出て時化(しげ)にあっってしまったらしい。「自分たちの周囲には命を落とした者も多数いる」とも話していた。これは一例だが、

①安心して暮らせる街を  
②労働相談に見る外国人労働者

- 1—はじめに
- 2—苦悩の選択からの出発
- 3—日常の取り組み
- 4—共生の新世紀に向けて

このような不平等な関係があちこちに存在している。土地や資源を奪い、働く場所まで奪って「貧困」を強制しておきながら、「だってら来なければいい」というのは身勝手な言い分だ。人が国境の壁を取り払い自由に行き来するようになることは必要だが、一方「安心して暮らしていける社会」は、彼・彼女らにとって、「出稼ぎに来なくて済むような社会」が保障されることが必要である。このことを踏まえながら、地域社会と外国人、カラバオの会の活動、今後のあり方について触れていきたい。

## 2 一苦悩の選択からの出発

カラバオの会があるのは、横浜市中区寿町。山谷・釜ヶ崎と並ぶ日雇労働者の街である。この運動のキツカケになったのも、日雇労働者との関係からであった。

日銭で生活することが習慣になっている日雇労働者にとって、年末年始の十日間くらいが一番厳しい時期である。この時期労働者は、炊き出しや宿泊、医療活動などの「越冬闘争」を街の公園を中心に行い、仲間うちを防衛しあう。一九八七年一月一日、世間が正月気分が浮かれている時、一人のフィリピン人が助けを求めてやって来た。越冬活動が最も忙しい時期だった。彼は日本に来て、十五日くらいしかたっていないかららしい。すぐ仕事にありつけるはずだったのに、タイミンが悪かった。持ち金は使い果たし、住むところもない。そのうえ、南の国とは比較にならない日本の寒さの中で困り果てていたらしい。と

にかく宿泊と食事をなんとか確保し、その他のことについては、忙しい真っ最中であつたし、肝心の言葉が通じない。大学に行った者はいても、英会話を専門にやってきたわけでもないの、カウンセリングができない。片言のやりとりの中で、時間をとってゆっくり話を聞く日時を伝えた。このことがきっかけとなつて、取り組みが始まることになった。五日〜六日くらいして、時間をかけて話を聞くことができた。だが、この時もう二人の間を連れて来た。この二人も同じような悩みを抱えていた。その次に来た時には、また違う人達を連れて来た。このようにして一カ月もしないうちに、四十〜五十人の人達と知り合いになることになってしまった。働く現場にアジア系と思われる労働者が増えていたことを感じていたが、予想をはるかに越える実態であった。いろいろな話を聞くうちに、その数の多さと深刻さに気付かされた。賃金・労働災害・住宅・病気・交通事故など多岐にわたっていた。寿日雇労働者組合の中に苦ししい雰囲気立ち込め、苦悩の選択を迫られていた。相談のほとんどは自分たちが経験してきたことであり、差別という背景の中で解決を困難にさせられてきたことばかりであった。放置しておくとも長年かけて築き上げてきたものが水泡に帰してしまう。しかし、こんなにも多数が労働、生活の分野に「侵入」してることが、就労機会を奪い、労働条件の低下を招かないか。また、出生から死亡までのあらゆる相談が持ち込まれるとしたら、力量不足で対応できない。そんな討論が行われている時も相談者は後を絶たなかった。

実態を知るための交流会や学習会を繰り返した。その結果、入国を阻止することは無理であるという結論を得ることになった。経済格差は三十倍から五十倍、失業率が四〇%を越えるような状況を余儀なくされては、どんなに取締を厳しくしたところで来てしまいうだらう。だとしたら、彼・彼女らへの不利益の強制は自分たちの問題である。一緒にやるしかない。合法かどうかを口にするより、優先させなければならぬ人権がある。かつて自分たちも苦しめられてきたことを見逃して、歴史を逆戻りさせることは耐えられない。「内外人平等」を訴えていこう。結論が出るのにそんなに時間はかからなかった。突き付けられた現実の前にちゅうちょしている余裕はなかった。

初めての出会いから、二カ月足らずで一緒に取り組んでくれそうな人達への呼びかけが始まった。国際交流を進めてきた人達、宗教者、労働組合、市民運動団体、医療関係者等だった。どこにもこの問題を取り上げるところがなかったためか、関心を寄せてくれる人は多かった。集まってきた人に現実を知ってもらい、直接触れ合ってもらうことにした。何度かの準備段階を経て、カラバオの会（寿外国人出稼ぎ労働者と連帯する会）として発足したのは、その年の五月。代表と事務所をどこにするかだけを決め、綱領も規約ももない団体としてスタートすることにした。互いを縛り合う「法律」はつくりださず、それぞれのかかわりかたは個々の力量と主体性に任せるとして、状況や事態の変化には、その都度話し合いをもって解決していくという方法を

とることにした。会が理想に近い形態で出発して、もうすぐ十年目に入るが、いまだに何らの問題も発生していない。

### 3 一日常の取り組み

結成の当日も、会場に相談が持ち込まれるくらい忙しい中でスタートしたカラバオの会だが、ここで日常活動と相談内容について述べておきたい。

労働相談が最も多い。賃金不払い、労働災害、条件違反、ピンハネ、解雇、倒産などがあるが、全く同じケースは一つもない。マニュアル化して誰にでも取り組めるようにするというより、その時々状況に応じて的確な判断が求められるので、経験と知識の蓄積が必要である。とはいってもそれほど難しいことでもない。調査や書類作成はすぐ身につくし、何でもそうだが、場数を踏んでいけばなんとかなるものである。景気の変動によって労働相談の内容も変わった。不況になると解雇や倒産、賃金不払いが増えてくる。ほかに、暴力を受けたとか、裁判につながるケースもある。

医療制度の恩恵を受けることができないので、けがや病気などの相談も多い。我慢を重ねて、自分ではどうすることもできなくなつてから来る。部屋の中で一人で苦しんでいた結核の女性は、大量の咯血に耐えられず、友人を通じて知らせた。建設現場で働いていた男性は、昼休みにトイレで倒れて意識不明になり、一緒に働いていた日本人が知らせてきた。それほどでもないにしても、重症患

者ばかりである。自殺未遂というケースもあったが、言葉も通じない異郷の生活の中で、精神と肉体がボロボロにされている。治療費を出せる者は殆どなく、周囲の援助に頼るしかなく、疾病への不安を抱いた日々を送っている。集団検診が受けられるように保健所に相談したところ、了解が得られて実現したので、各国語のチラシを配布したり、予防接種の呼びかけもやっている。

住居を紹介したり、保証人になったりする相談は、特別な場合を除いて引き受けないが、生活習慣の違いからくるトラブルの相談は、結成当時から頻繁にあった。狭い部屋に多数で住んだり、夜中まで楽しくやってしまったり、ゴミの回収日に関係なく出したり、洗濯物の干し方、トイレの使い方、掃除の仕方：自分たちにとって当然のことであっても、日本社会では許されない。ケンカになったこともある。その都度謝りに行ったり、交渉したり、相互理解を深める中で、解消していったほしい。

定住化の傾向が出てくる中で、それに伴う相談が増えてきている。在留資格の変更、査証の延長、妊娠、出産、入園、入学、結婚、養子縁組、離婚、父親の養育責任放棄、家制度の問題等である。結婚や養子縁組の場合は、その後、在留特別許可を求める手続きが必要になってくる。紙面の都合により内容をすべて紹介することはできないが、複雑な手続きを必要とするものばかりである。時間もかかる。例えば、在留特別許可を得るのに必要な書類は、少なくとも二十種類、多い場合は三十種類を越える。本人が理解できる言語のもの

ばかりではない。一緒にいてサポートしてやれる存在がないと殆ど無理。途中で諦めてしまふことが多い。書類がすべて整ったとしても、提出から許可がおりるまで短くても二年くらいかかる。結婚をした者が一緒に暮らせるようになるのに、こんなに時間がかかる。

その間仕事や生活に影響がなければよいのだが、精神状態は察することはできない。イライラが高じてトラブルを起こしたり、体調を崩す人が多い。もともと人間的な関係の中で、互いの文化や生活を理解しあうことは、口先だけで「国際化」を唱えるよりもはるかに効果的で、日本社会にとつてよいことなのだから、もっと自由にできるように簡素化すべきである。

人身売買や売春婦については、「女性の家サーラー」や「みずら」という専門のグループが頑張っているが、妊娠七カ月の女性に堕胎を強要したり、生まれた子供に責任を持たないといったことは、単に書類作成などの手続き問題だけでは語れないし、家制度の存続のために長男の「製造」だけに利用された男女が一人ずついたが、これなど人間を道具としてしか見ていない。人権を無視した差別が背景にあり、人として生きていくことを困難にしている。法律、制度など社会のありようが、国際社会から見直しを迫られている。

カラバオの会の活動は、週に一度の運営会議を中心に行われている。それ以外にも、必要に応じて会議が開かれる。ここでは対外的なことや、当面する課題、運動の進め方などが話し合われる。

電話受付は、火曜を除く毎日行われている

が、電話だけで済まないものは、日曜日を聞き取り日に当てている。もちろん、緊急の場合や事情に応じて対応している。受け付けた相談は、ケースごとに担当者を決め、交渉や手続きを進めていくことになる。

ニュースレター「KARABAW」は、二カ月に一度英語と日本語で発行し、会員と関係グループに送っている。会の案内パンフレットは、常時三方国語のものを備えておき、必要に応じて配布している。また地域向けには、韓国語、英語、日本語のミニコミ紙を二カ月に一度発行し、生活情報を提供している。一九八八年一月から発行している新聞切り抜き帳「外国人出稼ぎ労働者」は、北海道から沖縄まで全国各紙に掲載された事件や記事を集め三カ月に一度の割で出されている。これを見ると、その時代に何があったかすぐ確認することができ、「外国人問題」の研究には欠かせず、超一級の資料として、公共機関、学校などの図書館や専門家に利用されている。

相談活動や機関紙・専門紙の発行とは別に、ワークショップ、日本語教室、事例研究会、お料理教室、キャンプ、花見、みかん狩り、海水浴などの楽しい催しを時折混ぜながら、交流だけでも参加でき、そこで文化や生活について知ることができるので、外国人ばかりでなく、日本の若者にも好評である。拠点のある地域との関係を重視し、祭りやその他の行事に積極的に参加しているのも会の特色である。

#### 4 共生の世紀に向けて

戦争は、五十年以上たった今でも、多くの人に消えることのない傷跡を残している。これに対し、納得されるような反省も補償もされていない。「慰安婦」や強制連行の問題は明白な事実であるにもかかわらず、その責任すら認めていない。このままでは、同じ過ちを繰り返すことになりかねない。日本だけが国際社会と無縁に存在することはできないのだから、はっきりさせるべきだろう。それでも傷跡が消え去るわけではないが、現在進行形での人権侵害を放置することはできなくなる。大事なことは、今何をするかである。何十年もたつてからやるのではなく、歴史に汚点や悔いを残さぬためにも過ちは正すべきである。

目の前で生命の危機にさらされている者がいるのに、法や制度が認めていないからといって手を差しのべようとしたくないのは、「殺人幫助」になるのではないだろうか。九州と中部地方で、見るに見かねた宗教者が人道的援助を行ったところ、「人管法違反幫助」罪に問われた。人命より法が優先するという行方も、歴史に汚点を残したことになる。危険を冒せとは言わないが、日常性の中で、人権尊重の世論づくりが草の根のように広げられていけば、現状に背を向けるようなことが、まかり通ることはなかった。好況時は安価な労働力として目をつむり、不況になったら使い捨て。苦勞と貧しさだけを強制するのではなく、楽しさを豊かさを共有していくべきだと思う。

外国人だからといって、付き合いが難しいということはない。その気になれば、誰にでもできる。特定の人に任せるのではなく、

人にとって住みよい社会は、自分にとっても住みよい社会なのだから、一人一人がそれぞれやり方でやればいい。隣にいるあなたが、できることから始めていくボランティアがいい。この動きは、地域社会を変え、政治や行政にも大きな変化をもたらす。肩肘はらず、気負わず、自然体がいい。カラバオの会がある寿町も、会の結成当時と比べると地域住民の生き方が変わってきている。当初は排外的な落書きが多く見られた。消しもしないでそのままであるが、三年くらい前から新しいものは増えていない。逆に、仕事帰りに酒場と一緒にいたり、互いの部屋を訪問しあったり、囲碁や卓球を楽しんだりする光景がよく見られるようになった。「人助け」を意識してやっているわけではない。正に自然体だ。飾り気のない人たちがかりなので、根底に優しさをもっていることを信じていた。もともとと友好関係が深まるように、地域との関係を大切にしていきたい。

地域ボランティアは、時間にしばられず密着した付き合いができるので、きめ細かいケアができるのが強みだが、一方で、権限をもたなかったり、苦しい台所事情などがあり、悩みも多い。これを解消していくためには、できるだけ大勢の人が参加できるように、スタンスを広くもつことだと思う。今後は、行政や企業との関係も重視しなければいけない。市民ボランティアと同じように、企業や行政も長短持ち合わせていると思う。それぞれの枠や限界を補いあえるような関係が求められている。互いの必要性を認め合い、情報や資料の交換と、安心して暮らせる状況づくりの

ための連携を強化すべきだと思う。地球より重い人権のための協力関係は、誰も否定することはできないのだから、遠慮せずに市民団体を利用してほしい。行政は進んで接着剤の役割を引き受けてほしい。学校など他の機能

もつながっていくと二十世紀にふさわしい国際関係の在り方も見えてくるだろうし、時代にあわぬ法や制度も見直さざるを得なくなってくる。

日本が国際社会から信頼を得る第一歩は、

安心して暮らせる地域づくりから、内外人の壁を取り除き、一体となつて歴史の新しいページづくりを進めていきたい。  
ハカラバオの会（寿外国人出稼ぎ労働者と連帯する会）▽